

論文の概要および審査結果の要旨

氏名（本籍）	橋本章（滋賀県）
学位の種類	博士（文学）
学位記番号	乙第54号
学位授与の日付	平成25年5月22日
学位授与の要件	佛教大学学位規程第6条
学位論文題目	宮座とトウヤ制の民俗に関する研究
論文審査委員	主査 八木 透（佛教大学教授） 副査 鈴木 文子（佛教大学教授） 副査 市川 秀之（滋賀県立大学教授）

〔1〕論文の概要

橋本章氏の博士の学位請求論文である『宮座とトウヤ制の民俗に関する研究』は、民俗学の主要研究対象でもある「宮座」と「トウヤ制」について、特にその歴史性を重視する視座から丹念な考察を試みた民俗学研究の成果である。これまでの宮座研究に関する先行研究、具体的には肥後和男・高橋統一・関沢まゆみなどの成果を踏まえつつ、近江を中心とした地域の、中世から現代に至る宮座の変遷について独自の視座から検討を加えることにより、宮座研究のあり方自体を問い直す斬新な持論を展開した、すぐれた論考であるといえる。なお、本論文の目次構成は以下の通りである。

序 論

第1章 宮座への研究視座

第1節 研究史・宮座論の形成と展開

第2節 宮座研究と長老制－滋賀県草津市下笠町の「オトナ（長老）」の事例より

第2章 宮座と神社祭祀の事例に関する民俗学的研究

第1節 水利関係と宮座祭祀の擬似性

第2節 神社の近代化と祭祀関係の再構成－宮座事例の背景を探る

第3節 宮座内部の均質化についての考察－大阪府泉佐野市長滝の事例から

第3章 頭役差定とトウヤ制祭祀の事例に関する民俗学的研究

第1節 頭役制祭祀儀礼の民俗誌的研究－竹生島宝厳寺蓮華会の頭役差定を事例として

第2節 江州浅井郡大吉寺の放生会と頭役差定

第3節 トウヤ制祭祀の展開と宮座の変遷－三重県名張市滝之原の事例から

第4章 近江のオコナイ事例の研究－宮座とトウヤ制祭祀の見地から

第1節 近江湖北のオコナイ研究への展望－検証・坪井洋文のオコナイ分析

第2節 史料に見る民俗事例の検証

－長浜市高月町高野のオコナイと「御神事由来記」等から

第3節 近江湖北のオコナイ行事－トウヤ制による祭祀組織の諸相

結 論

本論文の「序論」において、筆者の橋本章氏は本研究の意義と目的について次のように述べている。「まず宮座とされる対象が、果たして所与のものとして認識すべきであるのか、その疑義を正す必要があることを、研究史の流れと実際の事例の分析から指摘する。そして、諸々の歴史的変遷を受けて在地の社会関係が流動することが常態となっているのに対して、トウヤ制が在地に受容されていることに着目し、今後同分野における研究は、特に現行の民俗を取り扱った分析を進める場合において、近代化とそれに伴う在地側の意識の変遷に注意を向ける必要があることと、宮座やそれに類する社会関係を分析する指標として、トウヤ制が裏付けとして展開していることを関連させて考察することで、これまでの宮座の成果を再度検討し、本課題における新たな論点を提起する一助を為したいとするものである」と述べている通り、近年の民俗学において、現代的な志向を殊更強調するがあまり、ややもすると事象の持つ歴史性が蔑ろにされるような研究動向に警鐘を鳴らし、特に宮座のような歴史性を濃厚に有する事例については、常に歴史的変遷に目配せしながら分析を試みる必要性を説いているのである。

ではここで、本論の内容を章を追って紹介したい。第1章においては、肥後和男・萩原龍夫・原田敏明・小栗栖健治・高橋統一・関沢まゆみ・原田敏丸・福田アジオを中心とした宮座やトウヤ制、および長老制をめぐる先行研究について、丹念な検証を試みている。それも、ただ漫然と先行研究を年代順に紹介するという構成を取らず、これまでの宮座研究の対象地域が近江に偏っていたことの背景や、祭祀長老制をめぐる諸議論など、テーマを設定することにより、また具体事例をあげながら実証的に先行研究に検証を加えるという表現法を取ったことにより、当該研究の問題の所在が明らかにされたといえる。

第2章においては、第1節で、東近江市上岸本・中岸本の事例より、水利慣行と宮座祭祀の擬似性について論じている。第2節では滋賀県草津市志那吉田・三大神社の事例より、社会に著しい影響を与えたと考えられる、明治期の神社合祀の諸相について、具体事例の綿密な分析から、その実態について論じている。第3節では、大阪府泉佐野市長滝の事例より、宮座の近代化における構成様相の変遷過程を追跡し、宮座と年齢階梯制の関係の是非について論証している。

第3章においては、第1節で、滋賀県竹生島宝厳寺蓮華会における頭役差定の事例より、トウヤ制祭祀に対する理解を深めるべく、今日伝承されている頭役差定の事例を民俗誌的に記録し、それを基に今後のトウヤ制研究への課題を明確に示している。第2節では、滋賀県浅井郡大吉寺の放生会における頭役差定の事例より、寺社縁起の成立とその背景について、地域史的な視座から分析を加えている。第3節では、三重県名張市滝之原の事例より、近世までは株座としての宮座を有していた地域が近代化の中で大きく変容し、その結果トウヤ制を受容してゆく過程について、きわめて実証的に論じている。

第4章においては、第1節で、滋賀県長浜市野瀬のオコナイの事例より、これまでのオ

コナイ研究の潮流について紹介するとともに、坪井洋文のオコナイ研究を例にあげながら、オコナイ研究の意義と今後の展望について論じている。第2節では、滋賀県高月町高野のオコナイの事例より、権門寺社による修正会・修二会等の仏教の行法と、現行のオコナイ事例とを結ぶ近世のオコナイ関連史料を探ることにより、オコナイをめぐる研究史の検証を試みるとともに、近江湖北におけるオコナイ行事の本質について論じている。第3節では、滋賀県長浜市杉野、およびその周辺地域のオコナイの事例より、近世から近代における行事や組織の変容について分析を試み、その結果として、オコナイと宮座・トウヤ制との相関性について論じている。

結論においては、これまでの各章にわたる種々の考察を振り返りながら、総括として、「宮座が中世以来の特権的階層による祭祀組織の系譜を引く事例であるとする、歴史学による基礎的な理解がある前では、現状の宮座事例の実態のみを民俗学的手法によってとらまえて検証するだけでは不十分だったのである」と述べ、序論で問題提起された、宮座研究における歴史的視座の重要性について、再度強調するとともに、これからの宮座研究には、トウヤ制へのまなざしが極めて重要であり、また近代化による祭祀儀礼や組織の質的な変容に関しても、注意深く検証してゆく必要性について、示唆的な持論を展開している。

〔2〕 審査結果の要旨

本論文が従来の民俗学における宮座研究の潮流からして、斬新かつ独創的だと思われるのは、基本的に以下の3点においてであると考えられる。

第1点として、橋本氏は事例に基づいた丹念な先行研究の検証より、高橋統一の「祭祀長老制」と関沢まゆみの「年齢の環」の論理に対して、疑義を提示したことである。特に滋賀県草津市下笠町のオトナとよばれる6人の長老衆の事例より、当該地域の祭祀儀礼を歴史的にみたときに、年齢の秩序が村落内において絶対的な意味を有するようなシステムが、古来連綿と続いてきたかどうか大いに疑問があるとし、元来は本家分家の差異や高持ち百姓であるか否か等の区別が優先されたのであり、当該村落で年齢的に最高齢になった者が必ずしも「一老」としての権威を持ち得たかといえ、必ずしもそうではなかったことを、聞き書きと文献史料から立証したことは大きな成果であるといえるだろう。

第2点として、第1点の内容と連続することではあるが、宮座を中心とした祭祀儀礼と組織を対象とする研究においては、歴史的な視座が極めて重要な意味を有することを、具体事例によって実証的に明示したことである。宮座をめぐる研究は、これまで歴史学・民俗学・社会人類学など、多方面からアプローチがなされてきた。中でもその研究において中心的な位置を占め、数々の示唆的な基礎理論を提示してきたのは歴史学であった。その成果を十分に継承しながら、歴史学が見落としてきた点や近代以降の変遷過程、および現行の宮座の実態等については、民俗学や社会人類学が牽引してきたといえるだろう。いずれの領域に偏ろうとも、宮座という研究対象の正確かつ広義の視座からの理解は叶わないことはこれまでも多方面から主張されてきたが、その点をより具体的に、方法論として示したことは評価に値すると思われる。

第3点として、長年にわたるきわめて豊富な実態調査と、緻密な文献史料の読解により、事例に語らせるという、民俗学的な手法によって論を展開しながら、一方で文献史料を適

切に示すことにより、立証的な論の展開を導いたことは大きな成果であったと思われる。特に数々の貴重な事例、および文献史料を提示し、そこから持論へと導く論法は、民俗学と歴史学のやや異なった方法を繋ぐ架け橋的な成果にもなり得たと考えられる。

次に、審査者が感じた本論文における問題点と課題についても触れておきたい。以下にあげる何点かに関して、今後の十分な検討が必要ではないかと思われる。

第1の問題点として、民俗学や歴史学がこれまで蓄積してきた宮座研究を、民俗学的フィールドデータから抜け落ちた歴史的変遷、動態的な視点からの研究の必要性を全体的には主張しているが、その目的と実際に橋本氏自身が行っている調査や各論稿に示されたデータは、その新たな展開を示すような実証的研究にはなっていないような印象を与える個所がある。その要因はいくつか考えられるが、一番の問題は、抽象的で感覚的な文章表現が多いこと、あるいは先行研究の問題点が簡単に示されるが、その問題を解消するために、どのようなデータが新たに必要であり、どのような検討がなされるべきであるか、また自らの調査がどの部分を補うものであるのかという点が明確に提示されていないことが問題だといえるだろう。また、滋賀県の事例を中心に検討しているが、宮座あるいはトウヤの制度全体の中で、この地域がいかなる特色をもつかが明示されていないため、近江という地域の位置づけが明確ではない点も惜しまれる。

第2の問題点として、本論の主テーマである「宮座」「トウヤ制」「民俗」「年齢階梯制」等の概念が必ずしも明確ではないため、議論に深みが見られない点があげられよう。とりわけ「宮座」と「トウヤ制」概念の不明瞭さのために、個々の事例をなぜ検討するのが理解できない点は問題である。また「民俗」の使用についても記述の個所によりブレが見られる。またその当然の帰結であるが、宮座とトウヤ、宮座とオコナイなどの関係性についても明確な結論が示されていない。とりわけ、実態を示す概念としての「年齢の秩序＝年齢階梯」と、分析概念としての「年齢階梯制」が混同している個所が見られ、その結果、分析の指標が非常に曖昧になっている点は今後の大きな課題だといえるだろう。

第3の問題点として、問題設定に対して示されている事例が必ずしも適切ではないことがあげられる。たとえば第2章第2節では、「神社合祀」を主題としているにもかかわらず、事例としては合祀されていない例を取り上げ、また第1章第2節では、関沢まゆみ氏の長老制を批判しながら、長老が祭祀において影響力の強い事例を取り上げている。さらに第3章第2節では、「トウヤ」について論じているのに、それと直接的に関係しない寺社縁起についての検討が中心となっている。このような事例の不適切性や、各章内における主題の一貫性等に関しても、今後の重要な課題として指摘しておきたい。

以上の通り、本論文には課題や問題点も少なからず認められはする。しかし、総じて明確な問題意識に基づいた具体事例の丁寧かつ緻密な考察と分析、および結語における宮座研究の将来に向けての示唆的な持論の展開など、豊富なフィールドワークの経験と、豊かな知見に裏づけされた論考であることは間違いない。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容であると判断する。